厨川稲荷神社の信仰と歴史

厨川稲荷神社の信仰

代表責任役員　工藤　由春

私どもが尊崇、護持している当社は、永承六年（一〇五一）から康平五年（一〇六二）まで行われた前九年合戦の最後の攻防戦の際に、鎮守府将軍源頼義（ちんじゅふしょうぐん・みなもとのよりよし）と息子の八幡太郎義家（はちまんたろうよしいえ）軍が攻撃直前に、大館の荒屋にあった稲荷の祠（ほこら）に戦勝祈願して、安倍貞任（あべのさだとう）勢を打ち破りました。その祠を文治五年（一一八九）の奥州合戦の際に源頼朝旗下の工藤小次郎行光が故事を重んじて現在地に遷座したと伝えられます。江戸時代には盛岡藩主家の信仰と庇護を受けた由緒がありながら残念なことにその経過を伝える古文書類が現存しません。

そんな時、神社の説明板の殿様の代数が間違っているのではないかとの指摘を受けました。より正確な新看板を作ろうと岩手県立博物館に相談しました。藩主代数が一代ずれるのは南部信直の扱いの差でした。三戸南部家当主となった信直は、天正十八年（一五八〇）に豊臣政権から近世大名として認められました。彼を初代とすれば、利直が二代です。信直は慶長四年（一五九九）死去で、江戸幕府は始まっていません。江戸開府を幕藩体制の始まりと考えれば、当時の当主利直が初代となります。そこで先人は藩祖信直、初代利直、二代重直と数えたと説明され、納得しました。最近は初代信直、二代利直とする人が多くなったそうです。そこで当主を初代光行から数えれば、信直は二十六代、利直は二十七代となり、齟齬は生じないとのことでした。

その際に、折角だから沢山ある絵馬や扁額を調査してほしいと依頼したのが今回の冊子化に繋がりました。もりおか歴史文化館所蔵の『御領分社堂　二』には、厨川代官所管内の下厨川村に正一位稲荷大明神があり、二尺五寸四面の板葺きの建物で、本地（ほんぢ）仏は寂光弥陀尊（じゃっこうみだそん）であるとあります。二十九代重信夫人が病気平癒（へいゆ）を祈願して回復したので、延宝三年（一六七五）に、御堂、戸帳、鳥居などを、三十一代信恩（のぶおき）の治世の元禄十六年（一七〇三）に二石六斗八升が神撰田の寄進を受けました。宝永二年（一七〇五）に拝殿が完成。同年、藩命により下賜金を持参して上洛。神道を束ねていた吉田家から神位正一位を授かりました。二間半四方の御堂に三間四方の葛葺の鞘堂（さやどう）が三十二代利幹（としもと）の代に建立とあります。現在の拝殿は護国神社を氏子総動員で移築しました。信仰の証として大変貴重なものばかりですので、調査結果をまとめて冊子とし、大切に後世に伝えていきたいと思っています。